

海という名の本屋が消えた (90)

平野義昌

諏訪山界限(8)

西東三鬼が感じ取った「神戸」を見てみる。
〈そもそも私が神戸という街を好むのは、ここの市民が開放的であると同時に、他人の事に干渉しないからである。誰がどんな生活をしていようと、どんな趣味を持っていようと、それはその人の自由であるとする考え方が、私の気性にあうのである。〉^{註1}
トーア・アパート・ホテルの住人たちがその代表だ。彼らには仁義があった。たとえば、女性はホテル内で商売をしない。
〈神戸は言葉が実にくたない街だから、彼女の良家語は特に異様に聞えた。〉^{註1}

神戸人としては心外な表現である。「兵庫神戸のなんどいや、大阪京都のなんどすえ」と比較される。「荒っぽい」くらいで勘弁してほしい。新興海港都市ゆえ全国からいろいろな人が食い扶持を求めて集まってきた。海の仕事はお上品ではやっていけない。

さてホテル新参女性、言葉はきれいなのだが、三鬼に食べ物をたかる。女給になり、短期間に外国語をマスターしてドイツ兵・イタリア兵(戦後は米兵)相手に稼ぐ。

三鬼が徒然なるまま窓から往来を見ていると、時々歓声のような声が聞こえた。
〈……それは坂の下の方で、トーアロードの上を横切る汽車に、ハチ切れる程に詰め込まれた兵隊の揚げる声であった。〉^{註1}

三鬼も句友の出征を見送った。彼にアルゼンチンのコンビーフを食べさせた。
〈戦争中の神戸の食糧は、他の都市のそれと大差ある筈はなかったが、何しろ、全市が闇商人の巢みたる街だから、不思議な品物がよく現われた。〉^{註1}

エジプト人エルバがドイツ兵から品物を買入手にくる。元はドイツ戦艦が連合国貨物船から略奪したもの。中国人ワンは配給の糠やフスマ(小麦製粉時にできる屑)を鶏卵に交換してくれる。

42(昭和17)年4月、米爆撃機が東京、名古屋、神戸を襲ったが、まだ危機感はない。
〈……街全体がボカンと虚脱していて、市民にも国際都市特有の呑気さがあった。〉^{註1}

三鬼は大空襲確実と判断し、山本通4丁目の洋館の一室を借りていた。43(昭和18)年夏、三鬼はここに移る。
〈その家は、明治初年に建てられた異人館で、ペンキはボロボロ、床はブカブカしていたが、各室二十畳数位の、ガンガラガンとした部屋ばかりであった。〉^{註1}

先住の画家一家が徴用されて工場住まいになり、居住者は三鬼と波子だけだった。花壇を野菜畑にし、水洗便所の水槽から肥料を調達した。隣家のワシコフ邸とブルム邸の分も利用した(補註1)。防空壕もこしらえた。
〈煉炭のある闇いっつもざらざらす〉
〈露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す〉^{註2}

45(昭和20)年3月と6月、三鬼の予想通り神戸は大空襲を受けた。ホテルも焼失した。ホテルで三鬼が英語を教えていた娘が行方不明になった。彼女は映画技師見習いだが、家族を養うため密かに身体を売っていた。三鬼は焼け跡を探し歩き、防火池の縁で彼女の溺死体を発見する。幼い弟を抱いていた。
〈そこまで見届けた私は、元来た道を一目散に走った。／途中で一度嘔吐した。／防火池をめぐる、生き残った者の号泣が、いつまでもうしろに聞えた。〉^{註1}

ホテル支配人・水村の子息(当時中学生)は、学徒動員でその池(防火水槽、縦横25メートル)を掘った、と証言する。^{註3}

空襲後、ホテルの住民たちが三鬼を頼って洋館になだれ込んで来た。食べ物は庭の作物、エルバが入手してくる丸焼けの鶏。時々女性たちの善良な客が食糧を持って来る。空襲のショックで赤ん坊を抱えた母親の乳が止まった。中国人青年が赤ん坊を亡くしたばかりの女性を探してくれた。助け合いながら、1ヵ月ほどで大方の女性は落ち着き場所を見つけて出て行った。
そのなかのC子が、進駐軍相手の酒場を開業するから1万円で部屋を貸せ、と提案。三鬼は英語ができるからマネージャー、と。前回、三鬼はバーの女性にホテルを教えてもらった、と書いた。その女性には三鬼にC子を紹介し、C子がホテルに案内してくれたのだった。三鬼にとって恩人である。

計画は進行するが、「チャプ屋(売春宿)」とわかる。三鬼は女郎屋のオヤジになる覚悟を持てなかった。解約を申し入れたものの、既に金は使っていた。どう工面したのか記憶にない。その後、C子は上京し、ナイトクラブを開業、大成功した(補註2)。水村子息は彼女のことも覚えていた。
〈加納町で店を開いていたマダムで、ひと際奇麗な人がいました。チェリーさんと呼ばれてましたが、どこか違うなと思っていたら、戦後、東京の赤坂の成功者として大きな話題になっていました。〉^{註3}

近隣住民は米軍進駐に不安を覚えていたところ、町内の富士ホテル(補註3)が軍政部宿舍になり治安は良くなった。戦前三鬼が純愛の恋人と宿泊したホテルだ。ここに兵士が200人ほどいた。三鬼の人柄で炊事兵たちが毎晩遊びに来る。彼らが連れてきた若い水兵が、和歌山で知り合った娘に連絡したい、通訳になってくれ、と頼む。まず娘が来神、続いて兄が交際を許すつもりで蒲団を担いで来た。当人同士は言葉も通じないのに外国人との恋愛に憧れている。まだ深い関係ではない。三鬼は娘に、彼と暮すことの無謀を説いた。水兵には、軍の牧師を呼んで今すぐ結婚式を挙げろ、と迫った。娘は兄と蒲団と共に帰った。水兵も礼を言い、数日して出航した。

三鬼は1階を住宅設備会社に又貸した。県庁と市役所から米軍接収建物の工事を受注。三鬼が交渉役・現場監督になる。最初の仕事は、小学校屋上のサイレンを解体して米軍のビル・ホテルに設置し直すもの。種類の違う5台の部品をごちゃ混ぜにしよう。製造元の技師を探し、組み立てと設置に3ヵ月を要した。他に港の倉庫のエレベーター修理、ジェームス山の水道取り付けなど。

難儀したのは商工会議所ビルの水洗便所修理。兵士たちは水を流すベダルを踏み折るし、詰まりも多発。汚水処理に奮闘する三鬼に中国系兵士が忠告した。アメリカでは最低の仕事、負けたからといって東洋人の誇りを失うな、と。三鬼は最低と言われて、「そこに自分を置く決心を新しくした」。この仕事には覚悟を持った。担当兵士ベンは完成するまで熱心に働く。「アメリカの労働者の良心」だ。クリスマスの夕方、パーティー会場隣のトイレが詰まり、食堂に汚水が流れ込んだ。二人は排泄物にまみれ、パーティーの時間までに修理を終えた。
〈……私はこの時を忘れないために、飼犬には代々「ベン」という名をつけた。彼には相すまないが。〉^{註1}

海岸近くのビル地下室の仕事は敗戦国の悲哀そのもの。昔の不完全な埋め立て工事のため、昼夜

ポンプを動かしても水があちこちから湧き出ている。そこにベッドが搬入される。宿舎ではない。「軍用女郎屋」である。プロの日本女性150人が集められた。兵士たちは酔っ払って電気設備やトイレを壊す。修理した先から壊れる。ついに米軍はトイレを屋外の海岸沿いに作った。仕切りも扉もなし。ベッド部屋も同様である。泥酔、セックス、汚物、悪臭、人種問題、乱闘……、大勢の兵士が進駐することの醜い現実だ。殺人事件が起こり、この施設は閉鎖された。女たちも去った。地下水工事だけが続いた。

戦争が終わって間もなく、波子は横浜に帰って行った。俳人たちが独り住まいの三鬼を訪ねて来る。誰ともなく洋館を「三鬼館」(写真)と呼んだ。ある句友は俘虜生活を経て帰還、肉親を亡くした。本職は精神科医、俳句から身を引く、と言う。三鬼は翻意を促した。
〈狂院をめぐりて暗き盆踊〉^{註2}
戦後の三鬼の句を紹介する。
〈国飢えたりわれも立ち見る冬の虹〉
〈寒灯の一つ一つよ国敗れ〉
〈中年や独語おどろく冬の坂〉
〈みな大き袋を負へり雁渡る〉^{註2}

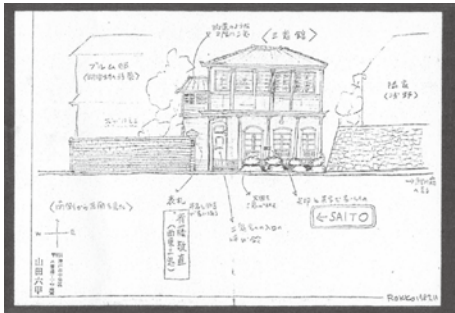
国敗れても人は生きねばならない、食わねばならない。日本国は富裕層に財産税を課す。家主は洋館を手放し、新家主が来た。三鬼は工事会社を納得させ、立ち退いた。
〈陳氏来て家去れといふクリスマス〉^{註2}

私は次の句を新時代の勤い女性たちを象徴している、と思う。眩しいほどの美である。
〈おそろべき君等の乳房夏来る〉^{註2}

戦時中、三鬼は肉体も精神も落ち込んでいた。神戸のホテルで心の平穏を取り戻した。「最低の仕事」で敗戦の現実を知った。俳人として再出発できた。三鬼は人を引きつける魅力を持つおじさんである。

48(昭和23)年、三鬼は神戸を離れ、加古郡別府町に移る。同年末、先の精神科医の斡旋により大阪の病院歯科部長に就任した。

- 註1 西東三鬼『神戸・続神戸・俳愚伝』講談社文芸文庫 2000年
註2 『西東三鬼全句集』角川文庫 2017年
註3 「西東三鬼・イン・ミステリアス神戸」(「神戸新聞」1993年5月30日)。
写真 山田六甲作図「三鬼館」スケッチ(大高弘達編著『西東三鬼の世界』海里書房、1992年)より
補註1 ワシコフは年齢56・7歳、職業不詳、日本人の細君は肺病で死亡。ブルムは仏人、邸宅は明治村(愛知県犬山市)に移築されている。
補註2 三鬼はC子をモデルにした小説・映画「夜の闘魚」を丹羽文雄原作と書くが、川口松太郎原作。
補註3 富士ホテルは1937(昭和12)年開業、木造2階建て、全館洋式54室。旧神戸女学院敷地内にあたるようだ。戦中は日本海軍が使用。46(昭和21)年米軍が接収(『オリエンタルホテル三十年の歩み』同編集委員会編・発行、1956年)。



乙仲通 界隈の魅力と可能性

乙仲さんぽ活動報告 ⑩

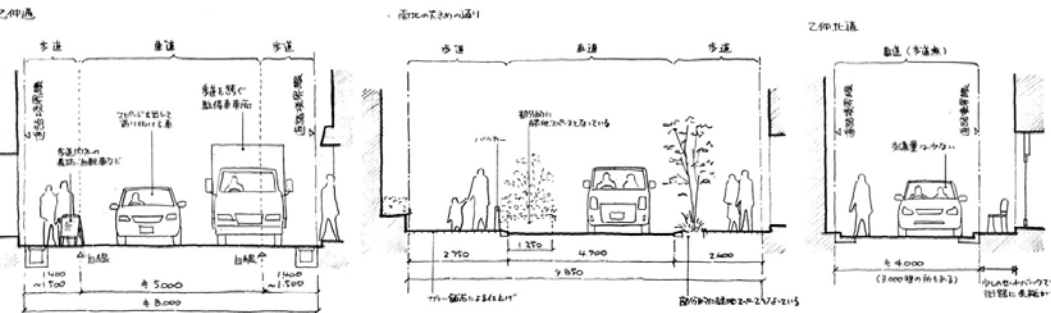
公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会
乙仲通界限デザインワークショップ実行委員会

街路の現状とその魅力

私たち、日本建築家協会(JIA)近畿支部兵庫地域会が2015年から三年間にわたり関西の大学生有志と共に取り組んできた乙仲通界限デザインワークショップ「乙仲さんぽ」。その記録連載の10回目では乙仲通界限の魅力のひとつでもある街路についてご紹介いたします。

界限は東西約1km程の乙仲通をメインストリートとして南北に枝葉を広げており、それぞれに魅力ある建物や店舗が並んでいます。

初年度の活動では、それらの店舗などが街路とどう関わっているのかをリサーチしました。栄町ビルディングや昭和ビルなど大正～昭和初期のレトロビルが多く建ち並ぶこの地域は、乙仲の名が示すようにかつては海運貨物業者のための街でした。そのため現代のように人と車との共存はあまり考えられておらず、それらが雑多に混ざり合う街路となっています。また、各ビル内の店舗はその存在をアピールするかのよう



街路の断面リサーチ

「乙仲さんぽ」の意義

私の家に北欧デザインの椅子が二脚ありますが、これらは20年ほど前に乙仲通界限のインテリアショップで購入したものです。乙仲通りを歩いたのはちょうどその頃が初めてだったような気がします。いや、それ以前にも来ていたのかも知れませんが、大阪生まれの私にとって神戸といえば三宮～元町界限であり、それ以外の地域についてはあまり意識していなかったので記憶にないだけなのかも知れません。山手の北野町や六甲界限、海側のメリケンパークやハーバーランドも馴染みある場所ではありますが、それらメジャーな地域をつなぐ街もまたスポット的に魅力があるというのが私の神戸に対する印象でした。乙仲通界限はそんな街のひとつとしてぼんやりと、でも確実に私の心に刻まれている街でした。

避けなくてはなりません。また利用者のための自転車の置き場なども少ないため、歩道が駐輪場と化している場所も見受けられました。その上配達車両が駐車していたりと、歩行者にとっては必ずしも安全性が確保されているとはいえない難しい部分も多く見えてきました。そして乙仲通を西へ進むとタワーロードと交差する所にロータリーがあります。これによって東西の人の流れが分断されてしまっていることもわかりました。

一方で乙仲通と栄町通をつなぐ南北の通りや乙仲北通という細い路地などを注意深く見ていくと、色々な試みがなされていることがわかります。南北の通りでは広い道路幅員を活かして歩道と車道との間に緑地帯やベンチを設けていたり、細い乙仲北通では建物側をセットバックして街路にゆとりを持たせている工夫も見られました。

「乙仲さんぽ」ではこのように街路についての調査や分析をし、地域の方々との意見交換も行いながら今後の改善の可能性について考えてみました。

歩車共存に向けての改善策はいくつか考えられました。しかしながら一部の改善策には地域の方の反対意見もありました。多くの問題を抱えた雑多な街路は、それこそが乙仲らしさを醸し出す大きな要素でもあることがわかったのです。機能改善することで乙仲らしさを損なってしまっては本末転倒です。先述の通り、現状でも街路には利用する人々が心地良くなるような工夫が点在しています。この既存の考え方を少しずつ波及させていくだけでも色々改善されていくでしょう。ここでの発見はその後年度を重ねてきたワークショップにおける共用空間のアイデアに引き継がれ、発展させることが出来たように思います。

この界限を歩く時、みんな街路を行き来して、あっちこっちの店舗に立ち寄りながらぶらり歩くのが楽しいのです。そう考えるとビルの中の細い通路も街路の延長と言えます。道路からビルの中の通路まで、シームレスな街路の在り方に明確な答えを見出すのは難しいですが、自然と形成されてきた今の形こそが乙仲らしさであることもまた確かでしょう。



街路における工夫の例

.....

このワークショップの実行委員として参加した際には、サポートする立場でありつつ、実際に参加する学生達と同じ目線に立って有意義な時間を共有出来たように思います。それまでの利用者側からは見えていなかった事業者側の思いや街が抱える問題点は、学生のみならず私たち建築家にとっても興味深く、また解決していくべき課題も多くあるように感じました。それら全てを解決していくことが困難であることは誰の目にも明らかでした。これまでに三年間のワークショップを通じて参加者は多くの提案をしてきました。大きな開発に関わるようなものから現状の小さなすきま空間を活かした方法、照明計画などすぐにでも手をつけられそうな提案もありました。それらの解決策は個々のポテンシャルは高いものの、ともすれば現在の乙仲の魅力無くしてしまう可能性を持ったものもあったように感じま

す。街が抱える問題点は実は魅力そのものであったりもします。近年は建築の高層化も進み、街の様相は変わりつつあります。でもそれを否定的に捉えるだけではなく、乙仲の長い歴史の一頁として見守っていきたいような気持ちもあります。

三年に渡り続けられた「乙仲さんぽ」ですが、ここで示された課題は街に何か残せたように感じます。引き続き小さな喚起は続ける必要もあるでしょう。そのわずかばかりの力が今後の自然発生的な魅力の発展に寄与してくれるならば、それは街にとってより良い成長となるのだと思います。

荒谷 省午 (あらたに しょうご)
荒谷省午建築研究所 代表 / 一級建築士実行委員長

